名古屋柳城短期大学

ちゃぺるにゅーす

第19号（クリスマス号）

2010年12月20日

「愛ゆえに生まれ、愛ゆえに死ぬ」

チャプレン　司祭　ヨセフ 下原太介

かつての死刑囚の遺体や骨が辺り一面に散乱している処刑場ゴルゴタ（「されこうべの場所」という意味）の丘。イスラエルにあるその丘の頂上に立てられた十字架の上で、今から約1980年前に一人の人が処刑されて息を引き取りました。十字架に架かった彼の遺体は棘付きの鞭で打たれた無数の深い傷で血にまみれ、無理やり担がされた十字架を背負い、力尽き、倒れた際に付いた泥にまみれていました。頭からは茨の冠の棘のせいで数本の血筋が滴り、脇腹には槍で突き刺された傷が大きく口を開いていました。四肢は痛みと苦しみに耐えるために強張り、恐ろしさと苦しみ、そして、悲しみで全身の震えが止まることのないまま息を引き取ったかのよう。

これがクリスマスの夜に生まれた幼な子の約33年後の最期の姿です。

私たちは毎年、クリスマスの季節になるとイルミネーションで美しく彩られ、クリスマスキャロルの流れる街並みをウキウキしながら散策し、愛する家族や友人と共に素敵な時間を過ごします。しかし、日本に住む人々の中で、この日生まれた、イエス・キリストという人が迎えた最期の姿にしっかりと向き合う人は多くありません。

人の誕生というものは、何ものにも優って素晴らしいということに疑いはありません。また、それと同時に、その生まれた人の人生が多くの幸せ、尊い志、そして、深い愛に満たされたものとなるように願わない人は誰もいません。それこそが生まれた理由、いのちの意味、人生の素晴らしさであるとも言われます。だからこそ、人は自分自身の悲しみや苦しみ、また、他の人の悲しみや苦しみからさえも目をそらし、逃れようとします。ましてや、死というものはその人生における生まれた理由、いのちの意味、人生の素晴らしさを一瞬にして奪い去る最大の敵であるかのように理解されがちです。

しかし、クリスマスに生まれた幼な子の生涯は常に他の人の悲しみや苦しみに向き合い、それらを自分自身の身に負い続けるという苦難と悲嘆の生涯でした。その極限の姿が、全ての人の罪の身代わりとなって十字架に架かり、死ぬという姿なのです。この彼に、想像を絶するほどの悲しみや苦しみに耐え抜く力を与えたのは、彼の私たちに対する愛以外の何ものでもありません。クリスマスの夜に生まれた幼な子、イエス・キリストは、そのために生まれたのです。私たちに対する愛ゆえに安らかに生まれ、そして、愛ゆえに壮絶に死なれた。家畜小屋の飼い葉桶の中に眠る、生まれたばかりの幼な子の安らかな寝顔は、十字架に架かり、叫びと共に息を引き取り、静かに頭を垂れるその顔と、愛ゆえに同じ顔をしていたに違いありません。

賑やかな雰囲気に包まれるクリスマスの夜、ウキウキと小走りに過ぎ去る時間の中で、ひと時でも静寂と厳粛な祈りの中に皆さんが身を置き、愛ゆえに生まれ、愛ゆえに死なれたイエス・キリストの誕生の意味をしっかりと理解し、心から感謝し、祝うことができますように。

クリスマス特集

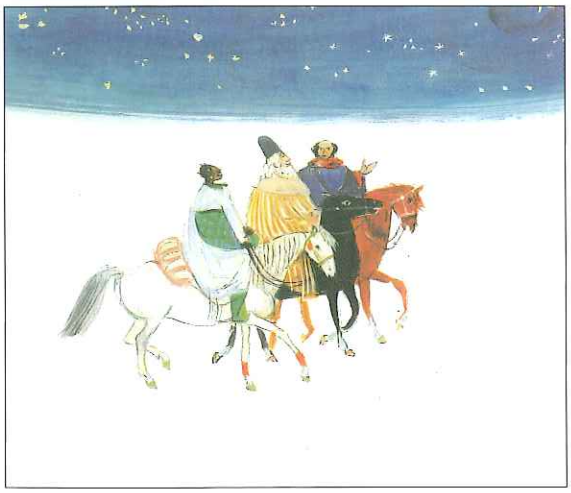
「もう一人の博士」ヴァン・ダイクより

尾上　明子

みなさんよくご存じのクリスマス物語に登場する東の国の占星術の博士たちの存在は、なくてならないものとなっています。博士たちは、不思議な星を目当てに、黄金・乳香・もつ薬を携えて救い主のみ子を尋ねて長い旅をし、とうとう救い主にお目にかかれるというお話ですね（マタイ２：１～12)。この物語は、私たちのファンタジーをかきたて、砂漠の原をラクダに乗ってやってくる博士たちをまるで絵を見ているかのように想像できるのです。

さて、ヴァン・ダイクという作家は、博士は３人ではなくもう１人いたとして、すばらしい物語を残しました。私は、このお話を日曜学校（教会）の先生が感動的に語ってくださったのを印象深く覚えています。さあ！どんなお話なのでしょうか？　ヴァン・ダイクのすばらしい語り口はぜひ原作を読んでいただくとして、本文から短くまとめてみたいと思います。

主人公は、ペルシャの山間の町に住んでいた学者のアルタバン。時は、皇帝アウグストゥスが君臨し、ヘロデがエルサレムを治めていた時代のことです。アルタバンは、仲間のバビロニアの３人の博士、カスパル、メルキオル、バレタザルとともに印の星を見つけ、ふたたびその新しい星が出現したときに決めた場所で落ち合い、幼な子である王にお目にかかるという約束をしていました。そのために全財産を売り、サファイア、ルビー、真珠を買い求め、その宝物を王に捧げるというのです。約束の期日まで愛馬ヴァスダを気遣いながらも走らせつづけました。そんなとき、暗闇のなかで突如瀕死の男に出くわしたのです。その男は恐ろしい熱病に侵されているようでしたが、ここでこの男とかかわっていたら、約束の時刻に間に合いません。ただ放っておいたら明らかに死んでしまうと思われました。アルタバンは、この差し迫った事態に激しく動揺しましが、見捨てることはできませんでした。水を飲ませ、薬を与え介抱しました。男は気力が戻り、なにも礼をすることはできないけれど、探している方は、言い伝えによるとユダの地、ベツレヘムでお生まれだということを教えてくれました。約束の場所につくと、そこには置手紙があり、砂漠を渡り後から追って来るように書いてあったのです。アルタバンは頭を抱え込みましたが、やむなくサファイアを売って食料やラクダを調達しました。彼は３人の博士たちの後を追って救い主に会うため一心に旅を続け、とうとうベツレヘムの村へ到着しました。そこで聞いたことは３日前、３人の仲間は、たしかにやってきたということでした。アルタバンは、その場所を突きとめるためにある家に入ってい



『クリスマスものがたり』
フェリクス・ホフマン さく
しょうの　こうきち やく
福音館書店　1986年

きました。そこには、赤ん坊を寝かしつけている若い母親がいて、奇妙な旅人がやってきて、すぐにどこかに行ってしまったこと、ナザレの男と母親、赤ん坊はその晩こっそり逃げて行ったこと、なんでもエジプトへ行ったという噂で気味が悪いと村人たちが言っているとのことでした。アルタバンは母親に抱かれている赤ん坊がそのお方であったらと心から思いました。疲れている彼のために母親は食事を出してくれました。そのうち赤ん坊はすやすやと眠ってしまいました。ところが不意に村の往来にものすごい騒ぎが起こり、女たちの悲鳴や泣き叫ぶ声、そしてそれをかき消すかのようならっぱのそうぞうしいひびきが聞こえてきたのです。「軍隊が来た！ヘロデの兵隊が赤ちゃんを殺している！」若い母親は、おそろしさのあまり、真っ青になり部屋の隅に行き、赤ん坊を抱きしめ、泣き声が聞こえないように着物をかぶせました。アルタバンがすぐに戸口のところへ行くと兵隊がやってきましたが、見慣れない外国人に一瞬ぎょっとして立ちどまりました。アルタバンは、ここには誰もいない。見逃してくれるような分別のある隊長がいたらこの宝石をやろうと思っていると伝えました。隊長は、ルビーをひったくり、赤ん坊はここにはいないと怒鳴りました。アルタバンは、家のなかにもどり、捧げるはずの贈り物をすでに２つも手放していることを神に許しを請いました。

さて、その後、アルタバンは、どうしたのでしょうか？　彼は、エジプトまでみ子と家族を追っていき、あちこち捜し歩いているうちに瞬く間に歳月が経ち、とうとう33年が過ぎようとしていました。アルタバンはまた、エルサレムに戻ってきました。黒髪は雪のように真っ白になってしまい、疲れ果てていました。彼がエルサレムに入ったときは丁度過ぎ越しの祭り、大勢の人々でごった返していました。しかし、この日は興奮した群象の波が城壁の外ゴルゴタの丘へと続いていました。アルタバンは、一体何があるのか聞いてみました。すると、３人が十字架刑に処せられること、２人は罪に値することをしたが１人は、自分を神の子と言い神を冒涜した。しかし彼は多くの人々から愛されていたと。アルタバンの疲れきった心に「神の子」という言葉が突き刺ささりました。私が探していた方は、この方であろうかと。このようなことを考えていたとき、マケドニアの軍隊が若い娘を引きずってやってきました。突然、娘は兵隊の手を振り切ってアルタバンの足にしがみつき、助けを求めました。奴隷に売られるのです。彼は、最初の男を助けたときと同じように困惑し動揺しました。この娘を助けるために真珠を差し出したら、もう何も残らない。けれどもこの行為は、信仰を試すことなのか、それとも神のみ心なのか。彼は、ふところから真珠を取り出し、娘に渡しました。そのとき、大地は暗くなりものすごい震動が起こり兵隊たちは、驚き逃げて行ってしまいました。またもや地震が起こったとき、この老人の頭上にかわらが落ち老人は息も絶え絶えになりました。娘は老人の口が動き何かを言っているのを聞きました。「いえ、ちがいます。わが主よ！いつ、私はあなたが空腹のとき食物をめぐみ、乾いているとき、水を飲ませましたか？いつ、あなたが旅人であるのを見て宿をかし…」老人の言葉が途切れると、天上からの声が聞こえてきたのです。「あなたによくいっておく。わたしのきょうだいであるこれらのもっとも小さいひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」。

アルタバンの旅は終わりました。宝はすべて、主がお受けになりました。「もう一人の博士」も主にめぐりあえたのです。

『もう一人の博士』
ヴァン・ダイク作／岡田尚訳
新教出版社　1984年

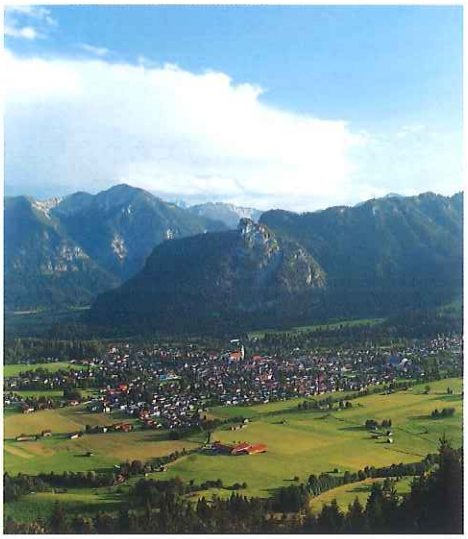
ドイツ・オーバーアマガウの「受難劇」～『世界一の村芝居』～

尾上　明子

〈美しい小さな村〉

去る６月私は、本学の中根淳子教授とともに、ドイツの受難劇観劇とイタリア・アッシジの聖フランチェスコの足跡をたどる旅に参加しました。今回は、受難劇のことを皆様にご紹介したいと思います。私にとってイタリアは初めてでしたがドイツの受難劇は２回目（20年前）でした。この劇は、『世界一の村芝居』と言われ、いろいろな意味で名実ともに世界一と実感しています。南ドイツ・バイエルン州にあり、イタリアの国境に近く、何日も滞在したくなるとても美しい静かな村です。村には木彫り職人がいて中世にはアルプスを越え、作品を売りに行ったそうです。今日もその伝統は残っており、徒歩で売り歩くことはありませんが、大きなりっぱな作品から小さなクリスマス飾りまで、魅力的なお土産が一杯売られています。また、村の多くの家々の壁にはグリムのメルヘンが壁一面に描かれていたり、聖書やキリスト教に関係した絵が描かれています。昔は家を建てる大工がしっくいの乾く前に描いていたそうです。このような伝統はヨーロッパのなかでもだんだん少なくなっているようです。

民家に描かれている『赤ずきん』のストーリー



オーバーアマガウ村

〈受難劇の始まり〉

受難劇は1634年から始められました。きっかけは、1600年代に起こった30年戦争と深く関係しています。この長い戦争の間、何度かヨーロッパはペストの大流行に見舞われ壊滅的な被害を受けました。この村も例外ではなく1633年当時の人口600人のうち、100人がペストで亡くなったそうです。ほとんどの家庭で犠牲者が出、村人は死の恐怖のなかで、ただただ祈ることしかできませんでした。そのとき、村人たちは神様と約束をしました。「どうぞ二度と私たちの村にこのような悲しいことが起こりませんように！」「私たちは、神様を信じて10年に一度受難劇をし、あなたの恵みに感謝します」と。準備が始まり、翌年、亡くなった犠牲者のお墓の敷地内に舞台を作り野外劇が上演されました。野外劇の伝統は今日も続いており、その後何度かりっぱな舞台が作られましたが、現在の建物も観客席約5000人分には屋根のある席、出演者はアルプスの山が背景として見える屋根のない舞台です。ですから雨が降ったら出演者は濡れてしまうのです。

〈受難劇って？〉

オーバーアマガウの受難劇って、どんなものなのでしょうか？ここでは、イエスの最後の数日間と復活までを劇と合唱、活人劇で綴っていきます。歌やオーケストラのレベルは高く、舞台監督は有名なザルツブルグ音楽祭の総監督もしている方で村出身者です。出演者は村に20年以上住んでいる住民に限られます。沢山出演する子どもには適用しません。活人劇とは、絵のように人が動かないで場面を見せる手法です。数分見せて幕が閉められます。

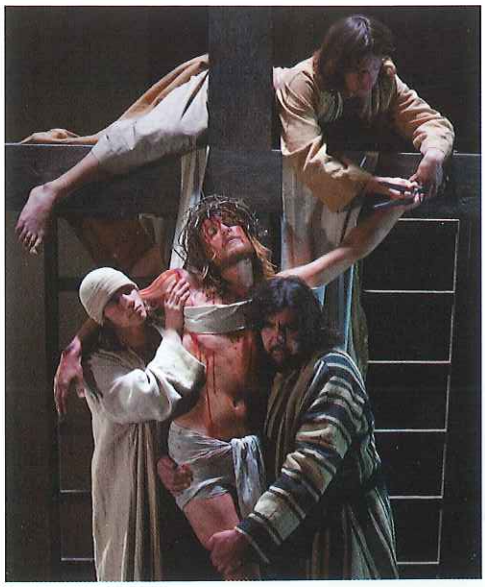
この劇は一度だけ上演されるのではなく５月から10月までの102回上演されます。村芝居といわれる所以は、5000人の村人のうち2500人位が直接舞台に関係し、直接間接には、村をあげて世界中からの観客、約50万人を受け入れています。

見せ場は、いくつもありますが一度に400人以上も舞台に出る群象、そして馬や羊、鶏や鳩、ロバ、らくだは借り物だそうですが、動物たちも村の住民？です。

さて、絵葉書のように圧巻はやはりキリストが十字架にかけられる場面でしょう。当時の最も重罪人に架せられた刑、十字架刑がとてもリアルに目の前で繰り広げられます。あまりにリアルなので20年前は全くこのしくみが分からなかったのですが、このたび、NHKの番組でとりあげられたので、近くで目を凝らして見るととても上手く釘が刺されたように見えるようになっていることが良く分かりました。しかしながら、いくら真似事とはいえ、本当にあのような不自然な形をとるわけですから、出演者の方（イエスと２人の犯罪人）は、大変でしょう！とにかく、休憩時間があるとはいえ、この６時間に及ぶ劇を身動きもせず見る人がほとんどなのです。

今回私が感激した場面のひとつはイエスが子どもを祝福されるところです。近代教育学の子ども観のモデルになった聖書の記事です。当時、女性や子どもは数のうちに入っておらず、ましてや女性たちが外で子どもを連れて誰かの話を聞くことなど出来なかった時代、母親たちが連れてきた子どもを弟子が追い払おうとしたとき、イエスは子どもを来るままにさせなさいと言い祝福され、「子どものようにならなければ天国に入ることはできない」とおっしゃった有名な箇所です。この場面を見ることが出来たことは、心からの喜びでした。

今回の旅で私は、長い伝統を新しい時代とともに歩みつつ守ること（この村の人々にとっては神様との約束を守ること）を目に見える形で世界の人々に発信しつづけていること、これは並大抵の努力では出来ないこととあらためて深く感銘を受けました。おとなのこのような姿を見て育つ子どもたちは幸せです。



創立112周年記念礼拝報告

11月1日（月）に創立記念礼拝が行われました。前日は大きな雷が鳴り響くほどの悪天候でしたが、創立記念礼拝当日は空も晴れ渡り良い天気でした。第１部では、下原太介チャプレンの司式の下、創立記念礼拝を行いました。司式の中では渋澤一郎理事長の祝辞、新海英行学長の式辞が述べられました。

創立記念礼拝の様子

第２部では、本学卒業生であり、絵本作家を目指している鈴木ありささんが製作した紙芝居「ヤング先生物語」をパワーポイントによる大型画面に映し出し、歴史的な背景について、当時の写真を交えながら尾上明子先生が説明、保育専攻科１年生の皆さんに朗読して頂きました。鈴木ありささんの描く優しいタッチの絵柄で、ヤング先生の人柄や柳城の黎明期のできごとが良くわかりました。

午後からは、例年通り、名古屋市の八事にある日本聖公会中部教区の共同墓地まで赴いて、ヤング先生をはじめとする柳城学院関係者の墓地礼拝を執り行いました。

（報告・髙瀬慎二）

鈴木ありささん（右）

1. 最初の生徒、杉浦いねさんとヤング先生

2. はとの遊戯で遊ぶ柳城幼稚園の子どもたち

3. 病床のヤング先生を見舞う生徒とポーマン先生

紙芝居「ヤング先生物語」

墓地礼拝の様子

後期の礼拝から

10月27日(水)&28日(木)、岐阜ダルクで働いておられる遠山香さんから薬物依存症についての貴重なお話をうかがいました。

「薬物依存症という病気」

岐阜ダルク　遠山　香

私は重度の薬物依存症者です。現在岐阜ダルクという薬物依存の回復支援施設で働いています。

私は小さい頃から身体がとても大きく、大人の誰もが私を見ると「大きいね～」と言い、びっくりする様でした。母でさえ「あんたは大きくてかわいくない」と度々言う事もありました。子供心に「私は大きくてみっともない」という言葉が大きく植えつけられたようです。６年生になった頃、「このまま身長が伸び続けたらどうしよう」と真剣に悩んでいました。心の中は不安と悲しみでいっぱいでしたが、その事は恥ずかしくて誰にも言えませんでした。「死にたい」とも考えるようになりました。なんとかつらい気持ちを隠して月日は流れ、高校に入った私はある異性と出会いました。その人は薬物（シンナー）を吸っていました。薬をすすめられた時、断ったら嫌われるのではないかと恐れた私は、見よう見真似で薬物を使いました。薬物を使うと意識がもうろうとし緊張が取れて、らくになった気がしました。異性と薬が自己肯定のできない私の気持ちを埋めてくれたように思い、それ以来私の人生は自分に近寄ってくる異性と、薬物にのめり込んでいきました。高校２年で覚せい剤を使うようになり、鑑別所に入ることでいったん薬物は止まりましたが、次は毎晩お酒をあびるように飲む生活になっていきました。20歳で結婚、二児の母となった私はお酒も薬も使わなくなりましたが、そういうものがなくなったしらふの私は、子供の頃感じていた不安や苦しみ、人と接する時にどうしてよいかわからなくなったりといった事で混乱していきました。

結婚相手はアルコールの飲み方に問題がありました。飲むと暴言・暴力が出ました。10年間の結婚生活は何がなんだかわからないままに過ぎていき、30歳になった私は、再び薬を使うようになりました。薬を使うと苦しい感情から逃れられたような気がしたものです。今思えば一時の気休めでしかありませんでしたが、その頃の私はそんなことはわかりませんでした。

離婚、精神病院の閉鎖病棟、警察に逮捕で懲役１年６ヶ月執行猶予５年の刑と問題が次々と起こったことで、「薬をやめないと…」と決心するものの、やめられず絶望していきました。手首を切ったり、電車に飛び込んだりもしましたが死ねず、自殺願望と理性の葛藤で苦しんでいました。

35歳になった頃、『薬物依存症』という本と出会いました。ダルク創設者、近藤恒夫氏の書いた本です。(皆さんもぜひ読んでみてください)

ダルクを訪ねると「薬物依存は病気で自分の意志ではやめられない」「意志が弱いからではなく病気だから治療をすれば回復できる」と言われほっとしました。もう自分を責めなくていいとわかったからです。

ダルクに通って１日３回行われるミーティング（言いっぱなしの聞きっぱなしで過去どうで今どうであるか自分の体験を話す）に参加し、自分の過去を振り返りました。薬物依存は「さみしさの痛み」の病気だと云われています。薬物が根本的な問題というより、生き方に問題があるといわれています。小さい頃から悲しみを隠して生きてきた私。仲間は「大変だったね。薬が必要だったんだよ」と言ってくれました。今はつらいとか苦しいとかミーティグで話す練習をしたことで言えるようになり、ありのままで生きられるようになり、薬が必要ではなくなりました。ダルクのプログラムは依存症からの回復にとても効果があります。薬物（様々な薬すべて）問題を抱えた方がいましたら、どうかダルクのことを伝えてください。

クリスマスを前に
～ろうそく点灯の祈り～

11月30日（火）、１号館の１階では、幾つものオーナメントを着飾ったクリスマスツリーの周りに、20名ほどの学生と教職員が集い、ろうそくに火を灯しながら、夕べのひととき、お祈りがささげられた。

クリスマスの前の四週間、それはアドベント（降臨節、待降節）の時期と言われ、イエス様の誕生を待つときである。

キリスト教の一年は実にこのアドベントから始まる。

次第に暗くなっていく外の景色とは対照的に、建物の内はろうそくの光によって明るさを増していく。

暗がりの中でこそ、明るさへの期待は強まり、共に明るさを待とうとするその思いは、希望へと成長していく。

手元のろうそくを順番につけていくという所作の中にも、このような体験は共有されていたのではないかと思う。

尾上先生のお話によれば、もともとは、ツリーにろうそくそのものを飾りながら、このアドベントの時を過ごしていたようである。

ツリーの常緑樹の緑、これは、エヴァーグリーンとも呼ばれ、いにしえより永遠をあらわす象徴でもある。永遠に輝く光、それはまさしくイエス様を指し示すものであり、わたしたちが、クリスマスツリーを見ながら、ほかならぬイエス様の姿を思い続けることができることは、なんとも素敵なことだと感じた。

（報告・菊地伸二）

ガラスのオーナメント（スイス製、ガラスを吹き薄い球を作り、ハンドペインティングしている。）
麦わらのオーナメント（ドイツ製、星や天使などのデザインで伝統的な手づくり製品）

クリスマス献金先

皆様からの尊い献金は、以下のところへお捧げいたします。

- ハイチ大地震支援
- アジア保健研修財団
- 名古屋キリスト教社会館
- 国際子ども学校
- キリスト教保育連盟
- 中部教区センター（可児ミッション）
- 聖公会保育連盟
- ひだまりの里
- 岐阜ダルク
- 岐阜アソシア

2010年12月20日発行　第19号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷